岩波講座　日本歷史

鎌倉時代の文藝

山田孝雄

PL Yamada, Yoshio
726 Kamakura jidai no bungei
.3
Y3

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

國史研究會編輯　岩波講座　日本歴史

鎌倉時代の文藝

山田孝雄

岩波書店

鎌倉時代の文藝

山田孝雄

PL
726
.3
Y3

目次

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
NOV 4 1970

一 序　言

私の講述題目は刊行豫定では文學となつてゐたが、思ふ所があるにより、文藝と改めたいといふ事をこの講座の主宰者に申し出で認諾を經て改めたのである。その理由は紙數を費すおそれがあるからこゝには略する。次にこの講述の態度について一言するを必要とすると思ふ。この講座は日本歴史を說くもので、文藝を主とするものでは無い。獨立の文藝史の上で說く場合と一般歴史の上で文藝を說く場合と多少觀察なり說明なりの上に視點の差がありうるものと思はるゝが、私は一般の歴史に於いての文藝の見方は文藝史の上よりも廣い見地に立つことを必要とする場合が無いといはれないと思ふ。卽ちかやうな見地に立つと、この文藝が他の藝術と如何なる關係に立つてゐたかといふやうな見方を要求せぬとも限られなくなる。鎌倉時代の文藝でいへば、平家物語の如きは一面平曲として音樂と提携して發展したものであるから、平曲を離れて平家物語だけを論ずることは嚴密にいふと不十分であるといはねばならぬ。又伴大納言繪詞と宇治拾遺物語の一章とは明白に關係が認めらるゝから、これも繪畫との關係を無視しては論ぜられないであらう。又文藝はもとより文化の一現象であるからして文化史より觀察することも一の見方である。或は又、文藝は一面當代思想の反映であるとも考へらるゝによつて、さやうな方面からも考へてみる必要があらう。しかし又

文化なり、思想なりといふ一般的觀察だけで、文藝そのものの全體が說きつくさるゝものでもないであらう。ことに文藝上の作品を思想そのものの直接の表現と見ることは教訓の手段とか、布教の方便とかに供したものの外は穩當な見解とはいひ得ないのである。私は以上の如く種々の見地から見てはじめてある時代の文藝を歷史的見地から見たといひうるものであらうと思ふ。しかし、いふは易くして實現は困難である。私のこの小篇がどれほどの事をなしうるかといふに、恐らくは所期の十分一も實現し得ないかも知れぬ。しかも一般の方針としてかやうに考へを立てゝおくことが必要であらうと思ふ。

次にはある時代の文藝を歷史の一部として說く場合の時代的關係を顧みる必要があると思ふ。卽ち歷史の一部として見る場合にはそれが前代より繼承せられたものであるか、その時代の特色として新に起つたものであるかといふ點などを委しく考へて說くべきものと思ふ。これについては次の如く種々の視點がありうるものと考へらるゝ。

一　前代より繼承した文藝
1　前代より繼承したまゝのもの
2　前代より繼承してその時代に於いて變化を生じたもの
3　前代よりの諸種の要素を繼承してその時代に綜合して面目を改めたもの

二　その時代新興の文藝
1　第一の2 3のもののうち新興文藝として見るべきもの
2　第一の2 3の場合以外に新に興つたと見るべきもの

以上の如く項目を立てて見たが、これはかやうに考へて見ることが出來るといふだけの事で、それらに該當するものが必ずなければならぬといふ譯ではない。ただかやうな種々な方面からいろ〳〵に考察しなければならぬものであらうといふことを述べた譯である。

二 前代までの文藝の二つの大きな流れの大観

ここに先づ、日本の文藝には二つの大きな流れがあるといふことを明かにしてさて後、論を進めようと思ふ。

わが國太古の文藝ははじめは混沌たる一であつたらうが、それが先づ分れて二つの大きな流れとなつたと思ふ。私はこの二の流れを「うたふ」と「語る」との二つの語であらはすことにする。これは支那の詩文や西洋人のいふ文藝の種類分けと必ずしも一致しないであらうが、今私は必ずしもそれらに拘泥するを要せぬであらう。私はこの二つの大きな流れが、時代によつて幾つかに分れ、又それらの支流がとけ合ひ、もつれあひしてわが國の文藝史といふ世界を構成してゐると思ふのである。私のこの考へ方が、まだ十分の試練を經ず多少の不備があらうと私も今考へないでは無いが、これは支那流、西洋流の見方で說くといふしかたよりもわが國の文藝には適してゐると思ふ。

「うたふ」といふ一つの流れは情感に訴ふることを主としたものであるが、それの姿としては節奏ある詩歌の形をとるものである。これが文字といふものを得てから次第に分化して「うたふ歌」と「よむ歌」との二つの大きな支流を生じたのであるが、後世になると、「よむ歌」の方が榮えて本宗のやうな取扱を受けるやうにはなるが、由來の方か

ら見れば「うたふ歌」の方が本家なのであらう。「語る」といふ方は事件を報告することを主としたもので、その姿は節奏ある形をとらないとはいひ得ないが、散體を主としたものであらう。而してこれが又文字といふものを得てからは口承の「語り物」と文字上の所謂「物語り」といふものとの二つの大きな支流をなしたと思ふ。この口承の「語り物」と文字上の「物語り」との別は元來その傳承の形式上の差異にすぎなかつたものと思はるゝが、平安朝時代に於いての假名の發達と共にこの文字上の「物語り」が空前にして殆ど絶後の大發展をしたのである。なほ又この語るといふことをその內容の性質の上から見れば、これには實際にあつた事柄、又實際にあつたと信ぜられて來た事柄を傳ふることを主としたものと興味を傳ふることを主としたものとの別を生ずるであらう。この興味を主としたものが、文藝の上に重大な役をなすのであるが、これには又事實を骨子としたものもあらうが、事實の有無よりも興味を專らとし、その極、空想的の創作も生じたであらう。ここに又事實を主としたものにも客觀的の事件を傳へることを主としたものもあらうし、自己の行動感想を語るものもあらう。かくの如くにして種々の支流を分裂しうるであらうが、その內容に卽して大別すれば、次の如く分流するものであらう。

「語る」の系統

1　己を語るもの

イ　己の行動を語るもの（日記　紀行）

ロ　己の感想を語るもの（隨筆）

2　他を語るもの

甲　事實と信ずるものを語るもの

イ　個々的のもの（説話）

ロ　組織的のもの（歴史）

乙　空想を語るもの（作り物語）

イ　説話の形によるもの

ロ　歴史の形によるもの

以上は私の日本文藝のこの時代以前のものについての大體觀であるが、私はこの時代の姿を見むが爲の準備として先づ、一時代前の平安朝時代の文藝の荒筋を見ねばならぬ。しかし多くの紙數を費すことを許さぬから、上の項目にあてて表を示すに止めよう。

甲「うたふ」の系統

一「よむ歌」

イ　和歌主として短歌（多くの勅撰私撰の歌集等）

ロ　連歌（主として二句の付合）

二　うたひ物

神樂　催馬樂　風俗　朗詠　今様　雜藝

乙「かたる」の系統

一　物語（記載による）

1　自己を語るを主とするもの

イ　日記　紀行　土佐日記、庵主、蜻蛉日記、更科日記等

ロ　隨筆　枕草子

2　事實を語るを主とするもの

イ　說話　伊勢物語、大和物語、今昔物語等

ロ　歷史　大鏡、榮花物語等

3　空想を語るもの（作り物語）

イ　短篇　堤中納言物語

ロ　組織的のもの　竹取物語、宇都保物語、落窪物語、源氏物語、狹衣物語等

二　語り物（口誦による）

先づ、かくの如く表をあげて見るが、ここに著しく缺陷の見ゆることは「かたる」の系統に於いて、口誦の語り物の實際を徵すべき物のない事である。平安朝時代の文藝はまさに文字記載のものを本宗としたものと見えて、謠ひ物の外は口誦のものが立つか否かを殆ど知るに由も無い有樣である。これは恐らくは文字に記載せられたものは智識階級及び上流の間にもてはやされ、多くの琱琢を加へられて長足の進步をなし、これが文藝の本宗又中堅たる如く見らるるに至つた爲であらう。かくして、元來本宗であつた口承のものは多く民間にうづもれて十分に藝術品としての琱琢

を受けずして或は退歩し、又は滅亡するといふ悲境に陥つたのではあるまいか。しかしながら、私はかくの如き現象を呈してゐたからといつて、口誦の語り物が全く根を斷つてしまつたものと思ふことは早計であらうと思ふ。私は語り物が決して根を斷つたものではあるまいと思ふ。ただしこれは當時の文化から見れば一定の水準點以下に沈淪してゐたものであるかも知れないが、全然亡びてゐたものとは思はれぬ。

三　うたひ物

今上の如き概觀を前代の文藝に得て、この時代に入つて見ると、稍異なつた姿を觀ずる。

先づ「うたふ」歌の系統としてこの時代の文藝を觀察するに、神樂、催馬樂、風俗等はすたれてはゐないが、しかし活動的であつたとは見られないものであつて、ただ前代からの繼承として朝廷貴紳の間に命脈をつないでゐたものであらう。朗詠も略〻上述の如き姿であつたやうに見ゆるけれども、これはその行はれた範圍は神樂、催馬樂よりは弘かつたやうに見ゆる。しかしながら、この時代に新に起つた朗詠といふものは恐らくは殆ど無かつたであらう。以上は要するにこの時代に亡びないが、前代を繼承したに止まるものといふべきである。

今様雜藝はこの時代に於いては白拍子の舞と共に榮えたものであらう。ことに後白河法皇に梁塵秘抄の御撰が作つたほどで、平安朝の末期は今様雜藝の極盛期といふべき時代であり、その直後の鎌倉時代初期は頗る盛に行はれたものである。しかし、それも鎌倉時代の中期以後にはどうなつたか明かにこれを知る事が困難であるのみならず、その

新作せられた歌曲も傳はらぬ。これらの點から見れば、文藝界の大勢は今様雜藝に利あらずして、或は亡び、或は水平線下に沈淪する事になつたものと思はるゝ。されば、うたふ物の系統としては前代繼承のものは大體に於いて衰へたといふべきである。

然らば、この時代の特色としての歌謠は無いのかといふに、ここに目につくものは宴曲である。宴曲はその集として傳ふるものは、眞曲抄、宴曲集、宴曲抄、究百集、拾菓集、拾菓抄、別紙追加曲、玉林苑、この外、外物と題する巻がある。これはその撰集が主として沙彌明空の手により、伏見天皇の御代より後醍醐天皇の御代に行はれたことを知るのであるが、明空は宴曲集の編者であると同時に作曲者であり、又稀に詞章をも作つてゐる。宴曲の集に傳ふる作歌者の名を見ると、洞院前大相國（公守）その他の公卿雲客もあり、又藤原頼光などいふ諸大夫又は侍らしいものの名も見ゆるが、又漸空上人、空圓上人、法印忠覺など僧侶も少からず、又或女房作もあるが、月江といふ僧が最も多く、作曲者としては明空最も著しく月江が之につぐ。これらの作者は明かにはいひ得ないが、詳かにし得た範圍では皆この時代中期以後の人である。

この宴曲といふものは前代には見えなかつたものであるから、この時代に生じたものと考へられるが、いつ頃から起つたものか。上にあげた作者の名からいへば、鎌倉時代中期以後のものといふべきであるが、歌詞の上から見れば、「蹴鞠興」に後鳥羽天皇を「顯德」と申し上げてゐるから、これは延應元年から仁治三年までの約三年間の某時に作つたものとなる。なほこの外にも仁治頃と考へらるゝ點がある。しかしながら、さやうな證據を殘して居らぬ諸曲のうちには或はもつと前の時代のものも無いとはいはれぬであらう。綾小路俊量の五節間郢曲に載せてある水猿曲といふも

のが、水の宴曲であつて宴曲の古體のものであらうといふ。この曲に似た短篇が宴曲集に四（宇禮志喜哉、優曇花、袖餘波、留餘波）、拾菓集に一（旅別）あるが、これは古體であるといふだけで、「袖餘波」を「或人作」、「明空調曲」といふほかは作者不詳である。長文の宴曲には幕府を謳歌したもの、鎌倉の社寺を讃したもの、明惠上人關係のもの等があつて鎌倉時代の特徴を見せてゐる。一般に宴曲の詞章は道行振か、列ね式のものか、物は盡しの類であつて、內容として一點に思想の凝聚したものが少い。顧みるに、水の猿曲はまさしく列ね式のものであり、上にあげた短篇はいづれも列ね式のものと見らる。而して道行も亦一種の列ねであり、物はづくしもいはば列ねの變形である。それ故に宴曲は詞章的には列ね式のものを本として開展して生じたものと思はれる。今この列ね式、道行式、物は盡しの詞章の模範を前代の歌謠について求むれば、梁塵秘抄に載するものに既に各その型を見るのである。しかも、この宴曲の詞章には朗詠の語句の影響も少からず見ゆるのであるが、當時一般に行はれた和漢混淆の新文體の影響が著しく見ゆる。

宴曲といふ名目は遊宴の席上で謠ふにより起つたものであらうと思はるゝが、その曲の題目の中に何の名殘とか別とかいふものの少からぬのは旅行の惜別留別の意を寓したものであらうし、祝言ものの多いものもやはり、宴席にふさはしいものが必要であつた爲であらう。その詞章は抒情といふよりは詠物といふべきものが多いが、これも列擧的のものが主たるによるものであらう。かやうな次第であるから內容は多く統一を缺き佳言麗句の臚列に止まるといふべきものである。しかし、謠物として音曲を主とするものとするならば歌詞の統一といふことに重きを置かなくても行はれうべき性質のものである。要するに、これは音曲を主とし、それに附隨した詞章と見なければならぬものであつて、音曲を離れて詞章のみを論じてこれを貶するのは中正の論ではあるまい。

よむ歌については先づ、この時代のはじめにあらはれた勅撰集たる千載集から觀察したければならぬ。この集は壽永二年に後白河法皇の下された院宣により、藤原俊成が撰して文治三年に上つたもので、その載錄する所は主として前代の作である。それ故に世の歌の歴史を說くものは大抵これを平安朝の部に入れてゐる。これが誤りであるとはいはないが、私は千載集を說かずして鎌倉時代の和歌を說くことの出來ぬものと思ふ。

四　和　歌

抑も和歌は平安朝の末、院政時代に革新の機運が動いて保守主義と急進主義との間に相爭ふ點が少くなかつたが、千載集の撰者が一代の巨匠たる手腕と寛宏の度量とを以て急進主義の弊をため、三代集の風骨を庶幾して取捨する所があり、勅撰集の體裁は古に復し、その採る所の歌も亦穩健に歸したやうに思はるゝ。然れども、金葉詞花時代に興つた新派といふものはその弊を見れば、厭ふべき點があるけれども、その底にある意氣は生命の自然のあらはれとも見るべき點があつて抑へ難いものがあつた。俊成の巨腕により、それらの弊たる險難の辭句を弄することは阻止せられたが、大體に於いてその新派の氣風はこれが爲に中正の道に向つて進展したといふべきである。撰者俊成は、はじめ六條家の歌學をうけ、又歌學の巨匠で、保守派の重鎭たる藤原基俊についてその薀奥を究め、更に急進派の主將源俊頼の歌風を學び、よく二派を調和し、穩健な歌を詠じた。これが爲に金葉詞花時代から紛々擾々としてゐた歌壇のさわぎは靜まり、天下一統の觀を呈した。この後にあらはれたのが新古今集である。

新古今集は建仁元年に後鳥羽上皇が和歌所を置かれ、その寄人たる源通具、藤原有家、藤原定家、藤原家隆、藤原雅經、僧寂蓮の六人に院宣を下されて撰せしめられたのに基づくが、寂蓮は翌年歿したにより五人の撰したものである。建仁三年に撰者が各撰歌を上り、上皇親ら取捨せられて元久三年に撰集の竟宴を行はれた。しかしながら、引續きその修正が行はれ、承久の亂によつてこの公式的修正は止まつた。しかし上皇は隱岐に出でましてもなほそれが批正を施されたのである。この集の勅撰者がいづれも一代の歌人として傑出した人であり、上に後鳥羽、土御門、順徳の三帝歌聖として仰がれたまひ、作者としても式子内親王、西行、藤原良經、慈圓、俊惠、秀能、長明、俊成女等のすぐれた人々がある。實にこの時代はすぐれた歌人の輩出したことは前代に類稀にして、それらの人々の家の集も多く、又歌學の勃興と著しく上皇の和歌色葉集、順徳天皇の八雲御抄の如き大著も出た。かくの如く、この集の歌は素質的にすぐれてゐた上に後鳥羽上皇が二十年にわたり絶えず練りに練り給うたものであるから精撰の度は古今に類稀なるものである。

新古今集はその實質上、最初の勅撰集たる古今集と其の美を競ふものとして和歌史上に重きをおかるゝものであるが、その歌の風も亦所謂新古今風といふものを立てた點に於いて著しいものである。この新古今風なるものはもとより新古今集にはじまつたものでなく、俊成が千載集に於いてその模範を示したものである。それは後拾遺集の頃から生じた雄壯な辭を用ゐようとする風は、千載集に於いてその弊を去り長を採られたが、それが新古今集に至つて極まつたといふべきである。さうして同じく後拾遺集の頃から著しくたつた叙景の歌が盛んに行はれた事、又著しくテニヲハを省く措辭法、主觀的のいひ方で客觀を描寫する修辭的技巧などが新古今風なるものの著しい點であるが、それ

らは大體に於いて俊成がこれを行うたものである。要するに新古今風は俊成の庶幾した歌風の大成といひうるものであらう。しかし、それは單なる俊成流の繼承ではなくして、それが一層洗煉琱琢せられたものと思はるゝ。かくの如く俊成のいふ所を標準とし、更に一歩を進めた事は當時の歌論の書にもその證迹をのこすのである。なほ當時源實朝の如き萬葉風の剛健な歌をよみ、今に於いて仰がるゝ人であるが、當時は恰も彗星の出沒した如き狀態で時世を動すまでには至らなかつた。

新古今風は要するに三代集の歌風と、後拾遺集以後新興の歌風とを調和發展せしめた結果といふべきものであるが、新古今集そのものは一面に於いては後鳥羽天皇の御趣味を著しく反映してゐるものといふべく、又當代歌壇の一大紀念塔といふべきものである。ここに若し、承久の亂といふ悲慘事がなかつたならば、如何樣に進展したであらうか。しかし、事實はかの亂で、この和歌の風は頓挫して、後には和歌の世界は面目をかへてしまつたのである。

承久亂以後鎌倉幕府滅亡までの百十年間は和歌の道は質に於いて進歩したといふことの出來ぬ時代であるが、量に於いては勅撰集だけについて見ても空前絕後といふべき時代である。卽ち新勅撰集から續後拾遺集まで八の勅撰集があり、これを古今集から新古今集までの八代集に比較すると、年數が三分一に近いのに、歌の數は一倍半に達してゐる。なほその外にも家々の集も多く、私撰の集としても萬代集、夫木抄などの大部のものも少くない。なほ又歌の作者も範圍が汎く、ことに武士の歌が多く見ゆる。これらの爲に、宇治川集（新勅撰集のこと）、鵜舟集（續古今集のこと）などいふ醜名をうけた勅撰集もあつたが、それは武士に阿つたといふ弊もあらうが、一面は又武士も多く歌をよんだ事を示すものであらう。要するにこの時期は和歌が量的に著しく弘まつたものである。しかし質の底下は爭ふ

ことが出來ぬ。これについては歌壇の權威を掌握した定家一流の門閥の責任も輕くあるまい。

定家は一代の巨匠として、我々の容易に議しうべき凡人では無い。しかし、定家が家隆を歌よみとほめ、自らを歌作りといつたといふ。その傳說の如く、彼は勉強して達した歌人で天才では無かつたかも知れぬ。そこで刺戟がなくては才藻も下り易くなつたのであらう。彼が、一人で撰した新勅撰集に於いて武士に阿つたといふ非難は別として、その歌は、新古今集の如き絢爛の美はなく、一般に質の底下の著しいものがある。而してこれより後京極家一流が、歌壇の宗家とはなつたが、歌道の上には大なる貢獻をしたとは見えぬ。ただ、この時期の末に近く京極爲兼が伏見上皇の院宣によつて撰した玉葉集が多少清新の氣運を導かうとしたが、それも徒らに新奇を好んで邪道に陷つた弊が無かつたとはいはれぬ。しかもこれとても大なる影響を生ぜず、大勢は默々として沈淪の底に走りつゝあつたのである。

五　連　歌

よむ歌の別種として連歌がこの時代に著しい發展をなした。連歌は平安朝に既に發生したもので、はじめは短歌の本と末とを二人して唱和するに止まつたが、次第に發展して平安朝の末には鎖(クサリ)連歌なるものが既に起り、且つ最初の句を發句とも云つた。ところが、この時代に至つて所謂五十韻、百韻といふ定形ある連歌を生じたので、連歌史の上ではこの時代は重要なものと見らるゝ。

この時代のはじめから承久亂以前の間に百韻、五十韻の連歌といふものが、殆ど定まつた形となり、さうしてそれ

らが盛んに行はれた。即ち後鳥羽上皇、順德天皇が甚だこれを好ませられ、公卿殿上人藏人北面などが盛んに之を詠み、一世の流行となつた。而して、その頃には所謂賦物（フシモノ）も行はれたが、これが一卷の統制を保つ原理となつてゐたやうに思はれる。なほこの時には有心無心の二を別けて行はれた。連歌は元來滑稽なり機智なりを以て當意卽妙の應答をするを主意としたものであつたが、この時代にはその本來の面目を傳へたものを無心連歌といひ、新に和歌的趣味を詠ずるものを生じ、これを有心連歌といひ、連歌の本宗ここにありとするやうになつた。これが連歌史上の一大轉機であると共に、後世の純正連歌が既にここに確立したのである。

純正連歌の基礎は承久以前に確立したが、其の發達は承久以後になる。承久以後は連歌の流行は前代を凌駕してます〳〵盛んになつて行くばかりであつて、後嵯峨天皇の御代には上御一人より公卿諸士女房に至るまで名人が輩出し、鎌倉に於いてもまた盛んであつて、後々まで鎌倉連歌の一流を傳へた。しかし、上流にはなほ連歌は盛んであるとはいひながら、それは和歌の餘技と目せられてゐた。然るに、上流にかやうに輕んぜられてゐる間に連歌は地下に根を張るやうになつて花の下連歌といふものを起し、道生、寂忍、京月、無生等の法師が、寛元寶治の頃には指導者としてあらはれ、花園天皇の頃には善阿といふものが出て無双の上手と稱せられ、連歌道の大先達として多くの門人があつたが、それらのうちから次の時代の最初の大先達救濟が出で更に連歌が躍進することになるのである。

六　日記紀行

ここに轉じて「かたる」ものの系統にうつるが、それには先づ、自己を語るを主とするものを見よう。この時代にあらはれた日記として從來知られたものは建仁の和歌所の開闔であつた源家長の日記、藤原信實の女で連歌の名人であつた辨内侍の日記又中務内侍の日記、飛鳥井雅有の春のみ山路等がある。又紀行としては先づ鴨長明の伊勢記といふものが在つた由であるけれども、その書は佚して詳なることは知れぬ。假名文の紀行としては阿佛尼の若い時のうたゝねの記、又晩年の十六夜日記がある。これらはその記事に興味ある事實も無いではなく、又それ〴〵多少の感想もあらはれてはゐるが、文藝上の作品として見る時に、深い趣とか新鮮な味といふものはなく、その價値が高いとはいはれぬのみならず、文體も亦主として前時代の模倣である。要するにこれらは平安朝の日記、紀行の亞流といふべきである。

以上の日記紀行がすべて平安朝の物の亞流たるに止まる間に、異彩を放つものは海道記と東關紀行との二つである。この二書の著者について從來種々の説があるけれどもいづれも信ぜられぬ。未詳といふべきである。しかし、二書共漢學の素養のあつた五十歳位の男子が、京から鎌倉に往復した折の記事である。年代は海道記が、貞應二年の事で、東關紀行はそれより十九年の後仁治三年の記事である。この二者はその文が共に和漢混淆體であり、題材も共通してゐるが、内容にも文體にも著しい差違がある　内容からいへば海道記には人生の悲哀を觀ずる一種の人生觀が寓せら

れて多少の異彩があるが、東關紀行は要するに客觀的た風物描寫に成功してゐる點に止まる。文體の方面から見れば、海道記は漢文の直譯を無理に和文にとり入れたといふ風で生硬にして熟してゐないものであり、東關紀行は和漢兩體の文が、十分とはいかぬが、海道記よりはよほどよく調和してゐるのである。

七　隨　筆

次に隨筆にうつる。隨筆の本質なり特色なりについて論ずべきこともあるがこゝに略して、直ちにこの時代の隨筆を見る。我々が鎌倉時代で隨筆といひうるものは方丈記である。方丈記は鴨長明が晩年日野山に閑居してゐた時、已が經來つた昔を回顧し、自己の身上又世相のはかなさを觀じて、その感想を敍した短篇であるが、その文章は和漢混淆の渾成した一體をなし、その想には長明その人の生活と人生觀とが著しくうかゞはるゝもので、鎌倉時代の代表的作品の一と目すべきものである。

八　說　話　集

次は說話を傳ふるものを見る事にする。これには短篇の說話を多く集めたものと、ある一の說話を傳へたものとある。しかしながら個々の說話を傳へた短篇は姑くおき、多くの說話を集めたものについて先づ論じよう。

さて短篇の說話を集めた著作はこれを說話集といふ名で呼ぶ事にするが、この時代に出た說話集を顧みると、これはその量が著しく多い。而してこの時代の說話集のうちには單に興味にまかせて編したといふもののみでなく、教訓とか宗教とかの或る目的又は信念の下に編せられたものも少くない。これらはいづれも多少は前代に前蹤があるけれども、この期には著しくなつてゐる。次には一般的な說話集から說くことにする。

一般的な說話集としては先づ

古事談　續古事談　宇治拾遺物語　今物語　古今著聞集

をあぐべきであるが、支那の說話等を專ら述べたものとしては

唐物語　蒙求和歌　百詠和歌　樂府和歌

の名をあぐることが出來る。

古事談は本朝書籍目錄に顯兼卿抄と注してあるが、村上源氏の刑部卿顯兼の著と思はるゝ。この人の歿年と本書の內部の記事とから推してこの書は建曆二年から建保三年までの間に著されたものと思ふ。この書は六篇に分けて部類を立て、本邦の公私の說話を載せてゐるが、前代の記錄によつたと思はるゝものが少くは無いし、文章も記錄體に假名を多くしたやうなもので、平安朝の物語の風ではない。しかしながら、又著者が親しく見聞した當代の說話も少いとはいはれず、趣味を主とした物語も亦少く無い。而してこれは後に出る續古事談、宇治拾遺物語、古今著聞集、十訓抄に影響したことの少くないものである。

續古事談は建保七年に著したとあるから古事談の後、五六年の間に出來たものであるが著者はわからぬ。古事談の

續篇として著したものであるが、文章は古事談よりも遙かに和文的である。しかし平板で興味をひかぬ文である。組織は古事談に似せて六篇にしたが(第三篇は傳らぬ)、その第六篇を漢朝とした點が最も異なるものである。文藝上の作品としては古事談よりは一等下るであらう。

宇治拾遺物語は作者はわからぬし、著作年代も定說がない。しかし承久以前に成り、後に多少の增補が行はれたものであるらしい。これは古今の傳說、俗談等百九十四項を集錄したものであるが、これを今昔物語集に比ぶれば、同じ說話が八十條許あり、古事談に比ぶれば二十條許もあり、著聞集に比ぶれば八條あり、その他出典のわかつてゐるものが約三分二に達する。しかし、それらは單なる拔萃又は譯出といふことは出來ぬもので、文章はその時代の姿に和げてあり、なほ往々章の末に著者の感想評言を加へてゐる點から見れば、今昔物語集などに比ぶれば、その心のもち方が大分違つてゐると思はるゝ。なほ又その出典の分らぬ部分のうちにも、著作當時の說話は大體この時代のものでここにはじめて傳ふる所であらうと思ふ。その中には鄙猥に渉るものもあるが、當時の說話集として見れば趣味の豐かなものであり、その筆致も多少潤のあるものであるから、文藝上の作品として先は成功したものといはるゝであらう。

この物語の說話には十訓抄と同じものが少くない。この事については十訓抄の所で論ずることとするが、その外に卷八の信濃國聖の事は繪卷物の志貴山緣起と略同じであり、卷十の伴大納言應天門を燒く事が伴大納言繪詞と略同文である。これらの繪詞には缺損があるが、大體この物語の文と略同文であるからその關係が密接な事は明かであるが、どちらが元かといふことは大きな問題である。先づ志貴山緣起といふものは俗にいふ如く鳥羽僧正の作でないにして

も、これは鎌倉時代以前の作品であらうといはるゝ。然らば、この物語がその出典の一としてその繪詞をとつて採錄したと見るのが、年代的に順當な見解となるであらう。次に伴大納言繪詞はどうかといふに、これは古來光長の作と傳へられて、これも動かし難い說と認められてゐる。さうするとここにもこの物語が繪詞を採錄したものであることがいひうるであらう。ことにその繪とこの物語の詞とを比較する時に、この物語がその詞を誤つてとつたか、俗化してとつたかした爲に、文意を害し、又故實にあはぬことになるものがある。かやうに考へてくると、この物語と繪詞との間に深い關係があると思はれ、その說話の原據の一部門として繪詞といふものを考へなければならぬやうにならう。さうすると出典のわからぬ多くの說話のうちには或は吾人が知らず、若くははやく亡びた繪詞を採つたものがないとはいはれぬであらう。しかし、これは想像に止まり、今日はこれ以上論ずることが出來ぬ。

今物語は藤原信實の作と傳ふるが、これは當時傳へられた逸話、又種々の說話五十三條を錄したものである。文章は平淡であるが、和歌連歌に關する逸話などは趣味のあるものも少くないので後世に永く傳へられたものも少くない。小篇であるが、後の文藝に及ぼした影響は看過することが出來ぬ。

次は古今著聞集である。これは橘成季の著で、建長六年に出來たものである。のせた說話は宇治拾遺物語に似てゐるが、互に重複するものは無い。これは三十六の部門に分けて說話を集錄したものであるが、著者のいふ所によれば、この人は琵琶を學び圖畫を好んだから詩歌管絃に關し、又繪畫にすべき本邦古今の說話を探錄したものである。この說話はかの部門の示す如く、頗る多方面であり、その數も今昔物語集にこそ及ばざれ、七百に垂んとし、宇治拾遺に比して三倍半に達してゐる（現存今昔物語集本朝部の說話の數は七百であるから略匹敵してゐるといはれよう）。か

やうに見ればこの集は當時第一の説話集で、その名にはぢぬものといふべきである。この集は一篇の大序の外その各部毎（但し、哀傷の部には小序が無い）にそれ〴〵小序を加へてある。大序は漢文であるが、小序は漢文のも和文のもあり、その部目の主旨又は主題の由來等を述べたものである。その文章はまゝ出典の原文を抄出したままのものもあるが、多くはただらかな和文としてゐる。往々章末に感想を加ふることも宇治拾遺物語に似てゐる。而してこれはその記事を公事の方面、宗教の方面、文雅の方面、武事の方面、世俗の方面、動植物の方面に分けて見ると、世俗の説話が全體の三分一を占め、これに動植物の説話を加ふる時は約半數を占め、文雅の説話は又略三分一に近いから、以上三者を合すると全體の八割を占むるのである。これを以てこの説話集の内容が如何に興味中心であるかの一斑を推すことが出來るであらう。この集の組織や内容はこれをよく研究すると當時の風尚思想等を知ることが出來ようと思ふが、これを十分に研究した人を知らぬ。而して、文藝上の作品としても趣味深いものがあり、又美藝史研究家にとりても重要な史料となるものである。

この集のうちにある説話六十餘が、十訓抄にあるものと同じである。それについてはこの著作が十訓抄より二年おくれてゐるから十訓抄から採つたといふのが通説である。私はもとよりこれを否定しないが、それは著者がとりこんだのか否かは問題である。これは大森志郎氏の古今著聞集考で研究したやうに、著者がとり入れたのでなくして、後人の抄入であるといふことは爭はれぬであらう。なほ又卷十一好色の事のうちの後嵯峨天皇の御事及びなよ竹物語の事も亦同じく後人の抄入であらう。

唐物語は支那の趣味ある説話廿七條を採錄したものであるが、著者は知られぬ。著作時代も明かでないが、平安朝

末期かこの時代の最初であらうと思はるゝ。これは、當時本邦の人口に膾炙した物語をのせたもので、その命名から見ると大和物語に對したものであらう。その文章は和文としてよく熟したもので、漢才のみでなく、國文に精通した人の作であつて、飜譯としては當時上乘の作といひうべきものであらう。これらの說話の原據は今詳論する遑もないが、正史から採つたと思はれてゐるもののなかでも世說とか蒙求とかいふ小說から得たものが多いのであらう。とにかくかやうにして支那の說話が本邦人の耳目に熟化した事を知る材料としてはこの物語は著しいものである。

蒙求和歌、百詠和歌、樂府和歌はいづれも源光行の著であるが、樂府和歌は世に傳ふるか否かを知らぬ。蒙求和歌も百詠和歌も元久元年の序があるが、蒙求和歌のには初秋とあり、百詠和歌のには初冬とある。蒙求和歌は李瀚の蒙求から二百五十の項を摘取し、これを和歌集の部立の如くにして十四部に分ち、部每に一卷をあてすべて十四卷に編したもので、各の事項について、一場の說話を下し、末にその意を詠じた和歌一首づつを添へたものである。そのさまがやゝ伊勢物語、大和物語に似たものともいふべきであるが、伊勢大和では物語と歌とは密接不離のものであるのに、蒙求和歌ではその歌は無くとも事かかぬ程度のもので、說話だけで事の趣は知らるゝものである。これは蒙求の原注によつてこれを譯出敷衍したものであらうが、また他の俗說をも加へた點があつて、蒙求の原注のままともいはれぬ點がある。而して、文章は必ずしも巧妙とはいはれず、まゝ生硬と評すべき點も存し、その說話を傳ふるといふ點では必ずしも不成功とはいはれぬが、興味湧くが如き趣は無い。これを唐物語に比するに一段と劣るやうに思はるる。百詠和歌は李嶠の百廿詠のうちから一の題について二の句をとり、これを說明敷衍して一場の說話として、その各說話毎に末に各一首の和歌を添へて十二卷としたものであるが、その體裁は蒙求和歌に同じく、その文學上の效果

も似たものである。この二書共に「和歌」といふことを以て題としたが爲に和歌集のやうに考へられ易いけれども、むしろこれは說話集とすべきものであるから、こゝに說いたのである。

樂府和歌は本朝書籍目錄に二卷とあるが、現代に存するか否かを知らぬ。これも源光行の撰であることは蒙求和歌、百詠和歌の序にいづれも「述樂府之章分五箇卷」とあるから疑ふべきでない。これは白樂天の新樂府の各項について、蒙求和歌のやうな體裁にしたものと思はるゝが、その歌と思はるゝものが新勅撰集(陵園妾)、新千載集(大行路)に各一首づゝ見ゆる。これら三の書はその說話こそ異なれ、大體同じ姿のものであらうが、文藝として價値が高いとは認められぬ。たゞ漢文學が國文に融合せんとした時代の一の現象としてこれを見るときに多少歷史的興味が無いとはいはれぬ。

九　教訓又宗教の爲の說話集

次に教訓とか宗教とかの或る目的又は信念の下に編せられた說話を見ると、これには一般的な教訓を施す趣旨の下に生れたものとしては

十訓抄

があり、佛教的のものとしては

寶物集　撰集抄　發心集　閑居友　沙石集　雜談集　私聚百因緣集　ぼろぼろの草子

等がある。

十訓抄は著者は未詳であるが、序文によれば、建長四年の著である。これは專ら修養の道を說くを目的としたものであるが、その敎條を十項に分ち、各項のはじめに序說をおきてその趣旨を明かにし、次に和漢古今の說話を多くあげて勸奬又は禁戒の例としたものであるが、その說話の數は凡そ二百八十餘條である。その訓誨の主旨は主として儒敎によつたものであるが、又佛敎に觸れた點も多少は存する。本書の目的はかくの如くに敎訓にあるのであるからして文藝として論ずることは著者の本旨であるまい。しかし、この多くの說話の中には明かに文藝的興味の存するものも少くないのみならず、事實を離れて興味本位になつたものも多少はある。又その說話の中には歷史的價値のあるものも少くない。なほ本書の說話六十一條は今本の古今著聞集にあるが、これについては上に述べた。又宇治拾遺物語にあると同じ說話が六篇ばかりあるが、これは十訓抄の方が後であるから、それに據つたものであらう。

抑もある說話をあげて、これを訓戒の用に供したことはこの頃にはじまつた事ではあるまいが、一の專書として今日に傳はつたものはこの書を最も古しとする。但しかやうな傾向は宇治拾遺物語、古今著聞集に見ゆるのであるが、これはそれが著しくなり、主題となつた點に於いて特異の姿を呈するのである。一般的の敎訓については上の如くいふべきであるが、佛敎的のものとしては前時代にもその類が少からずあつたものであるからして、寶物集以下の佛敎的說話集はこの時代の特色とはいはれぬ。ただ、この時代には國文で書いたものとしてのそれらが多くなつたことと、說話としての興味を主とするものが多くなつたといふことを述べておくに止めよう。なほ、この頃の佛敎的說話集のうちには興味本位といふべき程のものが少くはないのみならず、近世の通俗說話の源をなすものが少くない。それ故

にその道の研究者には重要な研究材料となるであらう。しかし、今これを說く遑をもたぬ。

十　個々の說話

ここに個々の說話をもの〻した物語としては如何なるものが、當時あつたかといふに、普通にあげらる〻ものは

時秋物語

位のものである。これは豐原時秋が新羅三郎義光の奥州に下向するのを追うて足柄山で笙の祕曲の傳授を受けたことを敍した短篇である。かくの如く今傳はるものが甚だ少いのであるが、當時かく個々の說話として傳へたものが稀であつたかといふに、私はさうではあるまいと思ふ。上にあげた志貴山緣起や、伴大納言繪詞の如きものが、卽ちこれにあたると思ふ。從來これらのものをただ繪としてのみ考へて文學上の問題としなかつたのは不備であると思ふ。宇治拾遺物語の個々の說話がそれ〴〵何等かの文藝上の價値があるものならば、それが繪卷の詞書として加へられてあるが爲に遽に價値が無くなつたとはいはれぬのみならず、宇治拾遺物語の如きは一面は繪詞の集成として考へてみてもよい場合ともならう。それ故に私は、上にあげた二の繪卷のみならず、この時代の繪卷に登載せられた詞章は、必ず文學者の一往の研究を經べきものと思ふ。しかし、これも紙數に限があるから論を中止する。

十一　歴史物語

次には歴史的の物語である。これには先づ

水鏡　秋津島物語　六代勝事記　五代帝王物語

を説くであらう。水鏡はこの時代のはじめにあらはれたもので中山忠親の作といふ。これは神武天皇以來仁明天皇までの歴史を和文に綴つたもので、大鏡に倣ひ、その以前の歴史を補はうとしたものであるが、佛說俗談が頗る著しくとり入れてあつて歴史としての價値は乏しく、文章も大鏡に比して下るものである。又、秋津島物語は水鏡に神代の記事がないのを補はうとして著したものと思はるゝが、著者は傳へられぬ。しかし水鏡以後のものであることは著しい。その價値は大なるものでもなく、又後世にも影響したとも思はれぬ。以上はすべて前代作品の模倣といふべきものであるが六代勝事記は稍趣を異にする。

六代勝事記は著者はわからぬが、後堀河天皇の御代の人で、高倉天皇の御宇から當今の即位まで六代の御代の大事を要をとつて記したものである。その事實を以て推せば、これは今鏡の後をついだものであらうと思はるゝが、體裁は簡單に帝紀を主としたに止まるものである。しかし、その敍述に生彩があり、文藝上の作品としての價値に乏しくは無い。ことに終の部分の承久亂前後の記事と感想とは感慨の深いものがある。五代帝王物語も著者はわからぬ。これは六代勝事記の續編ともいふべきもので、後堀河天皇の御代から龜山天皇の御宇までの記事であつて、體裁も似て

ゐるが、後嵯峨法皇の崩御に筆を絶つてゐる。文章と内容とは六代勝事記よりは稍下るけれども、漫なる摸倣ではない。

なほ歴史的物語に附隨して一言すべきは

愚管抄　唐鏡

の二書である。愚管抄は慈鎭和尚の著であつて、先づ神代から順德天皇までの史實を略敍し、次に著者當時の世相を評論したもので文藝上の作品といふことが出來ぬが、著者の有する一種の史觀政見を忌憚なく述べた點は類稀なものである。唐鏡は永仁頃の儒者藤原茂範の著であるが、十卷のうち六卷までしか傳はらぬ。これは大鏡などの體裁にならつて支那の歴史を和げ書いたものであるが、文章は海道記や蒙求和歌などに比してよほど熟してゐるものである。さてもかやうなものが生じたのも、當時の漢文學が國文に融合しようとした勢の餘波であらう。

十二　軍物語(語り物)

ここにこの時代の文藝の一大特色たる軍物語を說くことにする。これには

保元物語　平治物語　平家物語

をあげるべきであるが、これらの著作年代の考證等は一切ここに略して、ただこの時代の中期以前の代といふことに止めよう。これらは一面は歴史と見らるべきであらうが、純なる歴史ではなく、歴史的事實たる戰亂の世界を描寫す

るにあたり、その事實をば骨子としてそれに血肉を加へて潤色し、以て一種の文藝的作品としたものである。而してその作中の人物についても多少は文藝的の粉飾を施してゐる。たとへば保元物語では鎭西八郎爲朝を中心人物とし平淸盛などはこれに對しての臆病物の標本とした如きものがあり、平治物語では惡源太義平を大立物とし、事件の發頭人たる藤原信頼が臆病にして嘲笑を買ふべき滑稽な人物に描かれてゐる。平家物語ではかやうな描寫法がことに著しく、平淸盛は憎まれ役の第一人者として、宗盛は臆病者の標本として、平重盛は賢人の模範とし、源義仲は蠻勇のみの田舍者とし、而して源九郎義經が、ひとり中心の人氣役者として活躍してゐる。かやうな事は史實と多少づつ齟齬するけれども、文藝上の效果の爲に、かくの如きことをしたと思はれるものである。而して、文章は平家物語が最も圓熟し、保元平治の二は多少未熟生硬を免れぬ。さりながら、これら三者を上來述べ來つた多くの作品に比ぶれば、その活氣に富むことは殆ど比較にならぬ程であつて、ただ方丈記のみが、やゝこれらに匹敵しうるであらう。實にこの軍物語こそは當時代文藝の最高峯といはねばならぬものである。

加之、これらを更に考ふれば、この三者は共に琵琶法師の語つたものであるといふ特色をもつてゐる。平家物語の事はいふまでもなく、花園院宸記には平治物語を語らせて御聽きになつた記事があり、永仁五年の唱導集には平治保元平家の物語何れも語つたといふ證據がある。この三の軍物語は一面文藝上の作品であるが、一面は語り物であるといふ事になる。かくて考ふるに、かやうに物語といふものが文字の上で讀まるゝに止まらず、琵琶法師によつて語られたといふやうな、これに似た事實が、前代にあつたかといふことである。我々の現今知る範圍ではかやうな物語が前代の作品にあつたといふことを傳へない。然らば、かやうな事がこの時代に突然として起つたであらうか。私はさ

うは思ひ得ない。惟ふに、前代に琵琶法師といふものは居たのであり、それが何かしらぬが物語を語つたといふことは傳へられてゐる。ただそれらの物語が文藝上の作品として傳はる程のもので無かつたのかも知れない。ここに私はそれらの琵琶法師の物語といふ語り物が、この時代に非常な發展をしてかやうに軍物語と結びついたものと思ふのである。然らばかかる事が如何にして生じたかといふに、これは文藝が下降して一般民衆に光被しようとする傾向と、琵琶法師などの民衆的卑俗の物語が向上して文藝の域に達しようとする進展力との二者の合致した爲と思ふ。かくの如くにしてわが國の文藝史上空前の偉觀を呈したものと思ふが、これを誘導する一の緣となつたものはその文體が和漢混淆である爲に活氣を帶びたのと、聲調の美をつくしたとにもあるであらう。但しこれはもとよりどこまでも一の緣であるに止まるであらう。

なほこの軍物語の一種として承久軍物語がある。これは承久亂の顚末を記したものであるが著者はわからぬ。文章も敍述も平板で上の三者には及ばない。それが爲かあらぬか、これは語り物となつたとは聞かぬ。

十三　作り物語

次は作り物語即ち小說の問題である。この時代にも平安朝風の作り物語は少くないので、二十以上の名をあげうるであらう。そのうち

海人の刈藻　いはでしのぶ　岩清水物語　風につれなき物語　なよ竹物語　松浦宮物語

等を著しいものとする。しかしながらこれらは一般に文章は源氏狹衣の模倣であつて、すぐれたものといふものが無い。趣向としては狹衣を手本としたやうなものが少くない。或は又源氏物語の附錄のやうにする爲に作つた

山路の露

のやうなものもあるが、これも亦とりたてていふべき程のものも無い。而してこれらは恐らくは繪詞としてつくられたものもあらう。なよ竹物語の如き、長谷雄物語の如きは現にその繪卷が存するのである。なほこの時代には前代にあつた物語と同じ名の物語が往々存する。たとへば、

住吉物語　　とりかへばや物語

の如きものがそれである。これらについては種々の意見があるやうであるが、私は、これらは一面はそれらを當時の風につくりかへた爲でもあらうが、又繪卷とした爲に生じた變形も少からずあると思ふ。それもその原本の物語が存する時にはその異同詳略變形の度がわかるけれども、原本が亡びた場合にはこれを識別する標準が立たなくなるのは當然である。

要するに、この時代には平安朝風の物語はすべて生氣を失つてしまつたといふべきである。

十四　評　論

以上極めて概略であるが、この時代の文藝を一わたり眺めた事になる　然るにこゝにこの時代の文藝界に前代に始

ど見なかつた新現象が起つた。それは文藝上の作品に對する評論である。これが文學の萠芽といひうると思ふ。

抑も文藝上の作品に對する學問的の作業は注釋、考勘、論評等種々あるが、注釋考勘は主として前代の作品を對象とするものである。これは前代の作品が、その時代を經た爲に了解味讀を困難ならしめたといふ事が最も重な原因であらう。

注釋的の作業は和歌については前時代から既に行はれた。さうしてそれが歌學の發達を催して、この時代にその歌學が著しく進んだのである。語る方面の作品についても、藤原伊行の源氏物語釋の如きは前代の末にあらはれたけれど、それは極めて稀で、この時代に入つて盛んになり、藤原定家及び、源光行親行等河内一流の研究があり、弘安には宮中に源氏論義が行はれた。又藤原季經の枕草子の注もこの時代の初期にあらはれた。次に校勘も源氏物語に最も力をそゝいだやうであるが、藤原定家はひろく多くの物語歌集にわたつて校勘を加へてゐ、又仙覺が萬葉集に力をつくしたなどの事もある。これらすべて、この時代の文學者の事蹟の著しいものである。しかし私はこれを詳かに述ぶる遑をもたぬから論評にわたる所の無名草子をあぐるに止めよう。

無名草子はもと宮仕した事のある女房の言としてあるが、著者はわからぬ。これはこの時代の初期の著と思はるゝもので、大鏡などをまねて、問答の體にして物語の趣味などを論ずるさまにしたもので、源氏物語をはじめ、古今の物語の梗概をのべて批評を加へたるもので、當代以前の物語で今日亡びたものの梗概を推察するに役立だつ點もあるが、その批評には當時としてなか〳〵すぐれたものといふべきであり、狭衣をいたく批難したことなどは確かに具眼者の言といふべきものである。さうしてこれは結局は源氏物語を謳歌することになるのであるが、餘論として萬葉集

以後千載集までの歌集の評論又歌人の論に及んでゐる。これは當時としては出色のもので、文章も生氣があり、今日讀んでも興味があり、これまた文藝上の一作品としてあぐるに足るものである。

十五　結　　語

ここまで述べて來て顧みれば、如何にも所期の十分一もあげては居ない。しかしながらここで一往終をつけねばならぬ。顧みてこの時代の特色としての文藝は何かと問へば、うたひ物としての宴曲、よむ歌としての連歌、語り物としての軍物語があらはれた事を著しいこととする。その他には方丈記が、新文章の圓熟を示したこと、又多くの說話集のあらはれた事を見る。而してその說話には往々教訓とか宗教とかいふものが附隨することが少くない。かくしてその說話が繪卷物と深い關係を結んでゐることも著しい現象の一である。又かくして他の一面を見れば、この時代の一大特色として、和漢混淆の文體が完成し、これが新興の文藝の主たる方式となつた。卽ち宴曲、方丈記、軍物語等はこれを利用して成功したものである。さて前代より繼承したものについて見れば、和歌は量に於いてはまさるが、質に於いて底下した。日記紀行及び作り物語の前代摸倣のものはいづれも生氣を失つてしまつた。ここに舊物の勢力は漸次に衰へゆくが、新興のものはどうであるかと見ると、その勢力の鬱勃たるものがあつて抑へきれなかつたと思はるゝけれども、未だ潜勢力的で表面に霸權を握つてゐたのではない。かやうの現象はこの時代に於ける新興勢力の一般現象であつて、武士が眞に全權力を得たのはこの時代ではなくて南北朝以後であり、宗教でも文學（漢學のこと）

でも新興のものは根をこの時代におろしたが、この收穫は次の時代からである。書道でも繪畫でもみなさうである。要するにこの時代は平安朝文藝の終末を告ぐる時期で後の新文藝を誘導する基となした時期といふべきである。次にこの時代の新興の文藝が次の時代にどうなり行くかの大觀をのべよう。

まづこの時代の一般的特色と見ゆる新文體は永く後代を支配して今日に及んでゐる。その宴曲は次の時代で亡びるけれども、その文章の趣は謠曲の詞章の一の源となつてゐるであらう。この時の新興文藝たる連歌は次の時代には文藝界の主座を占め、つゞいて俳諧を生じ、その勢力また今日に及んでゐる。平家物語も語り物としての全盛期は次の時代に屬するもので、その餘流として生じた淨瑠璃は今日になほ榮えてゐる。なほ又かの繪詞は文藝と繪畫との提携であるが、この方式は民衆的に降下して奈良繪本となり、臭草紙類となり、今日の新聞小說にまで系統を垂れてゐるのである。

以上述べ來つたうちにも、ことに著しい事は繪畫と文藝との提携である所の繪詞と、文藝と音樂との提携である所の語り物であるが、ここにわが文藝の具象的性質の一の相を見るのであるが、かくの如きは古今に通じた、日本の文藝の特性であらうと思はるゝが、それが前代には支那式文化の一形式たる文字至上主義の爲に輕んぜられ、又は抑へられてゐたものが、ここに日本人本然の姿をあらはしたものと思ふ。而してこれらは多少その方式をかへても日本人の存する限り絶えぬものであらう。

昭和九年三月二十九日印刷
昭和九年四月　二　日發行

岩波講座 日本歴史 第七回配本 三

版權所有

國史研究會同人代表
編輯者　黒板勝美

東京市神田區一ツ橋通
印刷兼發行者　岩波茂雄

東京市神田區美土代町
印刷所　三秀舍

寺島製本

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02950 3133

PL
726
.3
Y3